

明治初期の独和辞書と和独辞書

—序文の翻訳と解説を中心に—

木 村 一／大 野 寿 子

1. はじめに

19世紀の訳語を考える際、オランダ語や英語、さらにはロシア語やフランス語については、江戸期からの対訳辞書をはじめ、いかなる状況のもとに成立し、そして展開し、影響を与えていったのかといった研究が多くなされている。

一方、独和辞書と和独辞書の刊行が明治初期以降に開花したため、ドイツ語の対訳辞書の特に日本語に関わる研究はそれほど多くない。ドイツは様々な点で近代日本に大きな影響を与えているのだが、主要な事象は明治期にあたる。いくらかを挙げると、日普修好通商条約締結（1861）以後の普仏戦争のプロイセンの勝利によってドイツ帝国が成立する（1871）。医学においては大学東校が従来のイギリス医学からドイツ医学採用へと舵をきり（1871）、軍事においてもフランス式からドイツ式への切り替えがなされ（1885）、法制もドイツを手本としている。

以上の理由により対訳辞書の中では後発ではあったものの、明治初期の独和辞書と和独辞書における訳語という観点、また先行する辞書との連環、そして後続する辞書また文献への影響といったことがらを含めて検討することが求められる。

あわせて、個々の言語における個別的対訳という微視的な観点はきわめて重要であるが、対象とする言語そのものの別を超えて、対訳辞書を訳語の集合体そのものとしてとらえると、江戸期に刊行された蘭和辞書、時として英和辞書がその他の対訳辞書の礎となっている。しかし、大きくはその流れの中に位置する独和辞書と和独辞書も巨視的には欠くことができないものであると考える。

換言すれば、それぞれの訳語について、微視的には個々に非連続的な

ことはあっても、巨視的には連綿とした連環における相関関係の中に位置づけることができよう。いずれにせよ蘭学にその根幹を見いだすことができる。しかし、オランダ語から英語にわたる対訳に終始するのみならず、広くロシア語、フランス語、ドイツ語の対訳辞書も視野に含めることで、対象言語の別や刊行順だけでは見いだしがたい依拠資料をはじめとした関係性が確認できるはずである。

そこで、本稿では明治初期の独和辞書と和独辞書の位置づけを素描するきっかけとして、明治初期に刊行されたものについて、大野寿子による独和辞書の序文の翻訳（『字和袖珍字書』『和譯獨逸辭典』『獨和字典』）を3.に、和独辞書序文の翻訳（『和獨對譯字林』）を4.に記す。それらに引き続いて、日本語研究資料の観点から木村一が書き記すこととしたい。

2. 明治初期独和和独辞書の概要

独和辞書の嚆矢としては、『官版 獨逸単語篇』（1862）が挙げられる。また、『独逸文典字類』（1871）や仏英独の『三語便覧』（1872頃）¹も刊行されている。しかしながら、いずれも単語集といったもので、近代辞書としての体裁は有していない。

明治に入り、独和辞書と和独辞書の刊行が集中的に行われるのであるが、何を以て単語集ではなく近代辞書とするのか、そもそもの基準が必要とされるところである。それには、分量（収録語数・頁数など）、形態・内容（見出し語・品詞表示・語義・用例・類義語など）、構成・体裁（段組・大きさ・巻数・装丁など）といったことが考えられる。

以下、過渡的なものも含まれるが、単語集からの脱却を図りつつある明治初期の独和辞書と和独辞書は次のようなものが挙げられよう（先行研究を含めながら記す）。なお、「ドイツ語書名」については該当ヶ所をそのまま転記し、日本語訳を付す。

<独和辞書>

1

日本語書名	『和譯獨逸辭書』 ²
ドイツ語書名	なし
出版年(ドイツ語)	1872年4月(第1分冊)～1873年9月(完本2冊)
出版地、出版社(ドイツ語)	京都 村上官兵衛(石本(1934))
編者など	京都中學獨逸學教官編、劉度兒夫閱
備考	1段組 日本語：縦書き 木版・和紙 ³ 劉度兒夫はR・レーマン、『和獨對譯字林』(1877)を校訂(榊原(2106)など)

2

日本語書名	『字和袖珍字書』
ドイツ語書名	Deutsch-Japanisches Taschenwörterbuch (独和ポケット辞書) zum Gebrauche der deutsch lernenden japanischen Jugend wie der, der japanischen Schrift und Sprache Kundigen. (ドイツ語学習中の日本の若者用にして日本の文字と言語に精通した若者用)
出版年(ドイツ語)	1872年8月(im 5 ^{ten} Jahre Meidji)
出版地、出版社(ドイツ語)	東京(Tokei) 學半社(Gedruckt in der Kurata Buchdruckerei)
編者など	小田篠次郎、藤井三郎、桜井勇作
備考	1段組 日本語：横書き 三修社復刻版あり、園田・若木編(2004)に序文の翻訳あり

3

日本語書名	『袖珍字語譯囊』
ドイツ語書名	DEUTSCH-JAPANISCHES TASCHENWORTERBUCH. (独和ポケット辞書)(大文字ウムラウトなし) ZUM GEBRAUCHE für SCHULER, KUNSTLER, REISENDE UND AUSWANDERER. (生徒、芸術家、旅行者および移住者用)(大文字ウムラウトなし)
出版年(ドイツ語)	1872年9月(FUNFTE JAHR MEIDI)
出版地、出版社(ドイツ語)	瓊浦 出藍叢蔵本 新塾活版(NAGASAKI)
編者など	山本松次郎
備考	1段組 日本語：縦書き

日本語書名	『和譯獨逸辭典』
ドイツ語書名	Handwörterbuch der Deutschen Sprache für Japaner (日本人のためのドイツ語中型辞書) NEBST GEBRAUCHLICHSTEN FREMDWÖRTERN, MIT EINEM VERZEICHNISSE DER UNREGELMASSIGEN ZEITWÖRTER. (最も慣用性の高い外来語ならびに不規則動詞表付き) (大文字一部ウムラウトなし)
出版年(ドイツ語)	1872年10月 (FUNFTES JAHR MEIDCHI)
出版地、出版社(ドイツ語)	東京 (TOKEI) 春風社 (VERLAG VON KWANKORIO (勸工寮))
編者など	司馬凌海, 河村之昌, 澤田勝伯, 明石文, 明石朝幹
備考	1 段組 日本語: 縦書き (ステロタイプ (扉による)) 三修社復刻版あり、信岡 (2002b) に序文の翻訳あり

日本語書名	『獨和字典』
ドイツ語書名	DEUTSCH-JAPANSICHES WÖRTERBUCH (独和辞書) MIT EINEM VERZEICHNISS DER UNREGELMÄSSIGEN ZEITWÖRTER. (不規則動詞表付き)
出版年(ドイツ語)	1873年 5 月
出版地、出版社(ドイツ語)	上海 (SHANGHAI) 美華書院 American Presbyterian Mission Press (APMP) (AMERIKANISCHE MISSIONS BUCHDRUCKEREI)
編者など	薩摩学生 松田爲常, 瀬之口隆敬, 村松經春
備考	2 段組 日本語: 横書き 三修社復刻版あり、信岡 (2003) に序文の翻訳あり

<和独辞書>

日本語書名	『和獨對譯字林』
ドイツ語書名	WOERTERBUCH der JAPANISCHEN UND DEUTSCHEN SPRACHE (和独辞書) durchgesehen von Herrn R. Lehmann, Lehrer an der deutschen Schule in Kioto. (京都ドイツ学校教師R・レーマン監修)
出版年(ドイツ語)	1877年10月
出版地、出版社(ドイツ語)	東京 (TOKIO) 日比谷健次郎, 加藤翠溪 (VERLAG VON K. HIBIYA UND S. KATŌ.)
編者など	律多留富勒曼校定 斎田訥於, 那波大吉, 國司平六
備考	2 段組 日本語: 横書き 勝海舟による賛辞、中村正直による序 (漢文)、三修社復刻版あり

なお、三修社の復刻版については鈴木（1981）による解説がある。全体をとおしては、早くは石本（1933・1934）、田中（1968）、近年では上村（1989）、惣郷（1989）、宮永（1993）、信岡（1996a・1996b・1996c・1997・2002a・2002b・2003）をはじめとした網羅的な解説がある。また、『獨和字典』は中川（1991）の著作がある。他にも参考文献に挙げたものに扱われているものも多い。

3. 『字和袖珍字書』『和譯獨逸辭典』『獨和字典』の序文翻訳

『字和袖珍字書』『和譯獨逸辭典』『獨和字典』の序文については、上述のとおり先行する翻訳（大意とするものもある）があるが、今後の研究のためにあらためて訳出を試みた。必要に応じて、訳注およびコメントを脚注形式で付し、簡便なものは〔 〕に記した。また、該当部分の図版や原文の掲載は省略する。なお、『和譯獨逸辭書』と『袖珍字語譯囊』にはドイツ語による序文に当たるものはないことを付言しておく。

また、『字和袖珍字書』『和譯獨逸辭典』『獨和字典』『和獨對譯字林』は三修社の複製版を、『和獨對譯字林』は複製版にあわせて明治学院大学図書館所蔵本を用いた。『和譯獨逸辭書』は京都大学図書館所蔵本と国立国会図書館所蔵本⁴、『袖珍字語譯囊』は九州大学附属図書館所蔵本を閲覧した。

3-1. 『字和袖珍字書』（1872）

序文

「独和辞書」の完全なる欠如を嘆く各方面からの声に推され、我々はその一冊の編纂を試みた。

この辞書が我々にどれほどの範囲での成功をもたらしたかを、我々は善良な公衆の判断に委ねることとする。

この手の企画の難しさをたとえ少しでも知っている者にとって明白なのは、ドイツ語というあらゆる言語の中で最も豊かで極めて繊細に形成された言語を未だ全く十分に理解しきれていない我々の前に、ほとんど

乗り越えがたい障害なるものが山積していたということである。その障害とは、最上の意志とその意志に注がれた尽力のすべてをもってしてもなお多くの見落としを感じさせるほどのものである。

それゆえ我々は否応にも、この成果物を学術批判的な眼差しに照らしたりはせず、むしろ我々〔編者〕の善良なる意志だけを考慮に入れていただくよう、心服の懇願をせざるをえない。

それに加えて、植字工がドイツ語というものに全く不案内であることを考慮するならば、習慣化された誤植も、きっと慈悲深い眼差しをもって喜んで見逃してくれるだろう。

さあこうなった以上はこの辞書と共に公的舞台にこの身を委ねよう！第2版が必要ともなろうものなら、我々は改訂に全精力を傾けよう。そして、ローマ字で表記された日本語を付け加えることによってこの本を豊かにしよう。だからこそその点ⁱにおける指南のすべてを、大いなる謝意と共に甘受しよう。

敬白

1872年 8月

S・オダ、S・フジイ、Ju・サクライ

3-2. 『和譯獨逸辭典』(1872)

序文

英語とフランス語の辞書がすでに数年来効果的に使用されてきた一方で、独和辞書というものがこれまで完全に不足していた。語彙の豊富さ、詩的彫琢性そして柔軟性においてはドイツ語が他のたいていの現存言語を上回っており、ドイツの学問たるや、ほとんどすべての個別領域において、あらゆる国々の知識人たちに高く評価されている。

これらの長所それだけで、ドイツ語の研究を有益かつ興味深く思わせるには適切かつ十分である。

ところが、つい最近ドイツが獲得したある大きな政治的影響ⁱⁱがヨー

訳注

ⁱ 「その点」とは、上述された「習慣化された誤植」、すなわち、外国語に不案内の者が作成した間違った植字ゆえにくり返される誤植のこと。

ⁱⁱ 1871年に成立したドイツ帝国のことであろう。

ロッパ諸国において、ドイツ語のための広く開かれた入口を獲得させただけでなく、日本においてもすでに著しい作用をおよぼした。その結果、今となつては数多くの分野において、学界のドイツ人たちが、彼らの母国の学問に新たな肥沃な土壌を首尾よく獲得するために尽力させられている。同様に、母国の学問のために新たな肥沃な土壌を得るという同じ目的に向かつて、無数の日本の若者たちが、ドイツという地を志向するのである。

それに続いて、次第に広い領域に出現しつつあるドイツ語習得という志向に際し、独和辞書の不足が歴然たる欲求になり、そのような辞書の我々祖国のための所有が、不可避の欲求となつていった。

このような関係性を見据えて、下記署名の者が、すでにかなり前から独和辞書編纂を決断し、同作業実行のために包括的な下準備をなした。それにもかかわらず生業とするいくつかの仕事が、この作業を独力で推進することを妨げたので、その者は、A・アカシ氏、T・アカシ氏そしてU・カウムラ氏に辞書の暫定的作業を託した。自身はこれら3者の作業管理に徹し、必要と思えた箇所に関り彼らの仕事を補完および訂正した。

上述の書〔本書〕のための基盤として、良書と定評のあるウィリアムⁱⁱⁱの小型辞書が使用された。それでもやはり本書は、最新かつ最善の典拠からの無数の追加によって実に幾重にも補完され、必要な箇所に限つて変更された。

このような数多くの拡充化の結果として、ウィリアムⁱⁱⁱの著書〔辞書〕の判型が大きくなったため、その結果、不適切となつた上述辞書のタイトル^{iv}が、「日本人のためのドイツ語中型辞書」^vに変更された。

かくしてこのような旗を掲げて我々は、我々の小舟を進水させ、信頼を育み、その結果としてこの小舟が、その試運転を幸運に乗り切るのみならず、ひきつづき頼りになり役に立つ乗り物であることを証明することになるだろう。

ⁱⁱⁱ 原文はPocket-Dictionary von Williamなので、「ウィリアムの中型辞書」と訳したが、Williams（ウィリアムズ）となるべきであろう。

^{iv} 訳注ⁱⁱⁱに同じ。

^v 「小型」という名ではおさまりきれなくなったという意味。

秋の東京（トーケイ）にて
明治5年（1872年）

ドクター・シバ（シバ博士）

3-3. 『獨和字典』（1873）

序文

外国語の研究は若い日本人のあいだでは、日々一層、自分たちの専門教育の不可欠の部分となってきた。実際、他言語の知識というのは学生たちに、慣例行事や法律、工業や手工業、他の国々の農業などについての知識の習得と、今の時代においてあらゆる人間的営為の基盤である学問知識の獲得を許容するものである。あらゆる海外諸国では、若者たちのための質のよい学校教育の完備が、政府の主要課題として認識されている。特にこのところ、最高の学校制度であるとの呼び声が高いのはドイツである。日本人がドイツの書物や学校を多く知れば知るほど、一層彼らは、自分たちの学術的専門教育の準備を、ドイツ語とドイツの書物の勉強でもって行う傾向にある。今すでに相当数の若者が、ドイツ語の習得を始めている。しかしながらその際に彼らは、独和辞書の不足を日々感じているのだ。この隙間を埋めるために我々は、1冊の独蘭小型辞書とホフマンの便利な辞書にならうことにより、この単語索引表を編纂した。我々は、我々の作業にはまだ不足があることを包み隠しはしない。しかし我々は、この書を徐々に改訂し、新しい版が存在し得るとしたら、より一層完璧に製作するつもりである。差しあったって我々は、我々の辞書が今のこの形であっても、学生にとって有益であろうことを望む。

薩摩学生^{vi}

^{vi} 原文はDer Schüler von Satzma。Schülerというドイツ語は、大学進学前の諸々の教育機関および私設の語学学校に通うものを示す「生徒」と訳するのが常なので、「生徒」と訳すべきだが、日本語の序文に「薩摩学生」とあるため、それに習い「学生」とした。厳密には、大学生を指すStudentのみ「学生」と訳すべきところだが、おそらくこの時代の日本語の「学生」の意味範囲と、ドイツ語のStudentの意味範囲には、少々差があるように思われる。

4. 『和獨對譯字林』の序文翻訳と、日本語研究資料としての位置

坂本（1985・1988・1989）の一連の研究に詳しく、特に（1985）には序文の要点が7つに分けて記されている。全文の翻訳から見えてくるものもあるために、以下に該当部分の図版（明治学院大学図書館所蔵）とともに、序文と注釈の翻訳のすべてを記す。その上で、日本語学的観点から若干を記すこととする。

4-1. 『和獨對譯字林』（1877）

序文

民族の発展というものは、他のいかなるものよりも、当該民族による学問の育成とその一般的な普及とに依存している。この一文の正当性を見抜いてか、我が国の政府は多くの学校を設立し、これらの学校で通訳の助けを借りつつ授業を行う多数の学識者を、ヨーロッパやアメリカから招聘した。それにより、勤勉な生徒^{vii}各々の持つ学外でも独学により精進したいという欲求が——とはいえそれは、外国語で書かれた書物の助けによってのみ可能であるのだが——、すぐさま表れ出る以上、外国語の習得というものが、学問習得あるいは一般教養獲得の第一要件となる。

かつて、ヨーロッパ諸国の中でオランダ人のみが日本と貿易していた折には、オランダ語の独壇場であり、特に医者によって学ばれていた。しかしながら、帝の下での政府再編成^{viii}以降は、我が国とヨーロッパおよびアメリカ大陸のあらゆる国々との間に活発な交流が展開した。その際に、これらの国々と日本との交流の基盤はとりわけ商業貿易にあり、世界〔国際〕貿易での使用言語は英語であるため、英語が当然のことなが

^{vii} 原文はSchüler. 大学で学ぶ学生ではなく、大学進学前の諸々の教育機関および私設の語学学校に通うものを指しているの、ここでは「学生」ではなく（「門弟」ともいい得るが）「生徒」という訳で統一する。訳注viと同様の注意を要する。

^{viii} 1868年の明治維新のこと。原文には、unter dem Mikadoと記され、天皇制であることが表されている。

ら我々民族に最も普及せざるを得なかった。したがって、英語習得のための良質な参考書にはなんら不足もない。

英語と並んで特にフランス語とドイツ語が、あらゆる言語の中でも最も普及した言語として学ばれた。非常に多くのドイツ人学識者が我が国の学校で授業を行っているという理由だけでも、ドイツ語は日本にとって大変重要である。特にそのドイツ人が雇用されているのは医学学校なのである。教養言語の中からの一言語習得を必須とするこの利点を度外視したとしても、要するにドイツ語の研究そのものが、多くの日本人の欲するところとなった。

さて、すでにいくつかの独和辞書が出版されているが、それらの一部には不備があるか、あるいは、双方の言語において同類義にあたる単語を、明確な用例なく並べるだけに留まっている。また、これらすべてにおいて、我々の国家全体における著しい変革により必須となった単語の諸表現に欠けている。それゆえこれらの辞書は、多くの点で時代遅れと見なされ得るし、良質な一書に向けられ得る要求のすべてには応えていないのである。

したがって、新しい「和独辞書」の出版は、我々には時宜を得ているように思われる。

さて、J・C・ヘボンの辞書が卓越したものとして、英語を学ぶすべての日本人によって賞賛されているため、それを自分たちの手本とした。そして、ドイツ語を学ぶ我が国の地方在住者^{ix}のもとへ、ヘボンの辞書と同じように役に立つ参考書を届けることは、我々の欲するところである。とにかく我々は、既存の独和辞書を何度も利用してみた。熟慮の末、そして、何人もの経験豊かな日本人の教師にこの件に関する助言を求めた後、本辞書の和独部門^xの単語を、日本語アルファベット〔イロハ〕順

^{ix} Landsleuteは「百姓」「農民」とも「地方の者」とも両方訳せるが、ここでは、職業のへだてなく辞書を行きわたらせるのではなく、東京以外の地域に住む者にまで辞書を行きわたらせることを主眼としているため、「地方在住者」とした。

^x ヘボンの辞書の例にならえば、和英部門（「和英の部」）と英和部門（「英和の部」）があるので、ここで和独部門と限定するからには、後に独和部門を編む意図があったことも推察可能となろう。このことはドイツ語の扉からも確認できる。

配列^{xi}に決定した（この件については「注釈」参照のこと）。

このようにして我々が本書を力の限り編纂した後、京都の学校教師・レーマン氏に、同書に目をとおしてもらおうという恩恵にあずかった。

大学で学ぶ者に、文章語としてのドイツ語論文作成の際の参考書を提供すること、これが我々の本辞書編纂の主目的である。したがって我々は、必要と思われた箇所すべてにおいて、単語の使用法に用例を添えて補った。そのような工夫によって本書が、上述の目的にかなったものとならんことを我々は望む。

1877年9月、東京

編者一同

注釈

ドイツ語習得の初心者が単語を引いたりさがしたりすることを可能な限り容易にするために、我々は、本辞書を日本語アルファベット〔イロハ〕順に配置した。さて、いくつかの日本語の文字が同じ発音を有し、その記号〔文字〕の使用が多く単語において定着していないという困難が、この配列の前に立ちはだかるため、我々は諸単語の発音を、ラテン文字^{xii}で示して先頭に置いた。その後、カタカナでの発音と漢字（表記）がつづく。したがって、日本の生徒たちにとって大きな見晴らしが獲得されると同時に、ドイツ語を自由に操りつつこの辞書を日本語習得のために使おうとする者には、大きな安堵が与えられている。

これから展開する覚え書きは、ある規則について解説し、その規則にしたがって我々は、日本語の音をラテン文字で再現し、単語を配列した。

日本語アルファベット〔かな〕というものは、最後の「ン」(n)も含めて73文字で成り立っている。しかしながらこの構成には幾つもの同音が存在する。たとえば、「イ」と「キ」、「ヂ」と「ジ」、「ヲ」と「オ」、「ヅ」と「ズ」、「エ」と「エ」である。したがって「イ」と「キ」で表記

^{xi} 現代の独和辞書と和独辞書の場合、見出し語がローマ字表記であるならばドイツ語アルファベット順、日本語表記ならば五十音（あいうえお）順という組み合わせが散見するが、ローマ字表記というのは順の組み合わせは珍しいのではないか。

^{xii} 「ローマ字」のこと。以下同様。

される単語すべてが I (イ) で、「ヂ」と「ジ」で表記される単語すべてが Dji (ヂ) で統一されたため (以下同様)、5 文字 (「ㇿ」、「ジ」、「オ」、「エ」と「ズ」) が欠落している。

残りの44の純音 (清音) と23の不純音 (濁音) にしたがって、すべての単語が以下の (表の) ように、「イ」(i) から「ス」(su) まで67の部に分けられている。

イ i	へ he	ル ru	ソ so	ノ no	プ pu	キ ki	モ mo
ロ ro	べ be	ヲ o	ゾ dzo	ク ku	コ ko	ギ gi	セ se
ハ ha	ぺ pe	ワ wa	ツ tsu	グ gu	ゴ go	ユ yu	ゼ dze
バ ba	ト to	カ ka	ヅ dzu	ヤ ya	エ ye	メ me	ス su
パ pa	ド do	ガ ga	子 ne	マ ma	テ te	ミ mi	
ニ ni	チ tsi	ヨ yo	ナ na	ケ ke	デ de	シ shi	
ホ ho	ヂ dji	タ ta	ラ ra	ゲ ge	ア a	ヒ hi	
ボ bo	リ ri	ダ da	ム mu	フ fu	サ sa	ビ bi	
ポ po	ヌ nu	レ re	ウ u	ブ bu	ザ dza	ピ pi	

この67の部それぞれにおいて、単語は、その単語の第2音、第3音に關しても同様に、これら67文字および最終音「ン」(n)にしたがって配列されている。同音は、次のような順序にしたがっている。まず第一に清音の短音、次に清音の長音、それから清音の二重音^{xiii} (イツト、ittoなど)、第4番目に濁音の短音、第5番目に濁音の長音、第6番目に濁音の二重音 (イツパク、ippaku など)、そして最後に最終音 (ン、n) である。たとえば以下のとおりである。

<i>a</i>	
(I), イ.	IBAU, イバフ.
I, イ.	IBARI, 井バリ.
<i>b</i>	<i>e</i>
I (I), イヒ.	I (PPA) I, イツバイ.
II, イゝ.	IPPAKU, イツパク.
<i>c</i>	IPPAN, イツパン.
II- (I) RERU, イヒイレル.	INI, -u, イヌ.
II-HARU, イヒハル.	INISHI, イニシ.
<i>d</i>	<i>f</i>
II- (PA) NASHI, イヒパナシ.	I- (HŌ), イハウ.
IRO, イロ.	IBO, イボ.

^{xiii} 同一の子音を連続して示した促音を指すか。

IRO-IRO, イロイロ.	<i>g</i>
IROHA, イロハ.	I (BŌ), イバフ.
IRO-BANASHI, イロバナシ.	IPPON-DATSI, イツボン.
IROTO, イロト.	ダチ.
IRO-DORU, イロドル.	I-HEN, イヘン.
IRO-TSUYA, イロツヤ.	IPPEN-GOSHI-NI, イツベ
IRO-DZUKI, イロヅキ.	ンゴシニ.
IRO-KOTOBA, イロコトバ.	ITO, イト.
IRO-GOTO, イロゴト.	ITŌ, イタフ.
I-RON, イロン.	ITTŌ, イットウ.
I-HAI, イハイ.	IDO, 井ド.
I-HADZUSU, イハズス.	I-DŌ, イダウ.
I-BA, イバ.	IDO-BATA, 井ドバタ.

- a) 第1音節の清音短音
- b) 第2音節の清音短音
- c) 第3音節の清音短音
- d) 第3音節の濁音短音
- e) 第2音節の濁音二重音
- f) 第2音節の清音長音
- g) 第2音節の濁音長音

すでに上述したとおり、単語の配列によってではなく、発音によって並べられている。したがって、たとえ同音が（「イ」と「井」のように）別の記号（文字）で綴られていても、同音で始まる諸単語は一つの部門に置かれている。いくつかの困難を引き起こしているのは、2文字あるいは3文字が一緒になって一音を表すような諸単語である。たとえば、「チヨ」（Tsiyo）、「チャウ」（Tsiyō）、「シヨ」（Sho）、「シヤウ」（Shō）、「シユ」（Shu）、「シユウ」（Shū）など。同じ音が異なった日本の文字で表される諸単語も同様である。たとえば、「シヤウ」、「シヤフ」、「シヨウ」、「セウ」、「セフ」など。とはいえ諸々の単語は、本辞書では、それらの発音によって配列されているので、我々は、「シヤウ」、「シヤフ」、「シヨウ」、「セウ」、「セフ」をすべて Shō、あるいは「チャウ」、「チャフ」、「チヨウ」、「テウ」をすべて Tsiyō と記した。

上で引き合いにだされた音が含まれる諸単語を容易に探し出し得るた

めには、以下のことを覚え置くように。

- 1) 「トウ」、「タウ」の類はすべて Tō と記され、「ト」(To)の部内の「ヲ」(o)の長音のところに収録される。
- 2) 「チャウ」、「テウ」の類はすべて Tsiyō と記され、「チ」(Tsi)の部内の「ヨ」(yo)の長音のところに収録される。
- 3) 「チャ」は Tsiya と記され、「チ」(Tsi)の部内の「ヤ」(ya)の短音に続く。
- 4) 「ヂヨ」あるいは「ジヨ」は Djo と記され、「ヂ」(Dji)の部内の「ヲ」(o)の短音に続く。
- 5) 「ジヨウ」、「ジヤウ」、「ゼウ」、「デウ」の類はすべて Djō と記され、「ヂ」(Dji)の部内の「ヲ」(o)の長音のところに収録される。
- 6) 「リヨ」は Riyo と記され、「リ」(Ri)の部内の「ヨ」(yo)の短音に続く。
- 7) 「リヤウ」あるいは「レウ」は Riyō と記され、「リ」(Ri)の部内の「ヨ」(yo)の長音に続く。
- 8) 「リウ」は Riū と記され、「リ」(Ri)の部内の「ウ」(u)の短音に続く。
- 9) 「カウ」、「コウ」の類はすべて Kō と記され、「コ」(Ko)の部内の「ヲ」(o)の長音のところに収録される。
- 10) 「ケウ」、「ケフ」、「キヤウ」の類はすべて Kiyō と記され、「キ」(Ki)の部内の「ヨ」(yo)の長音のところに収録される。
- 11) 「シヨ」は Sho と記され、「シ」(Shi)の部内の「ヨ」(yo)の短音のところに収録される。
- 12) 「シヤウ」、「セウ」の類はすべて Shō と記され、「シ」(Shi)の部内の「ヲ」(o)の長音のところに収録される。
- 13) 「シヤ」は Sha と記され、「シ」(Shi)の部内の「ア」(a)の短音に続く。
- 14) 「シユ」は Shu と記され、「シ」(Shi)の部内の「ユ」(yu)の短音のところに収録される。
- 15) 「シウ」あるいは「シユウ」は Shū と記され、「シ」(Shi)の部内

の「ユ」(yu)の長音に続く。

上述の67文字にしたがった67の部内の諸単語の順番は、次の場合には遵守され得ない。つまり、「ツ」(tsu)が「パ」、「ペ」、「ト」などの文字の前にある場合である。ドイツ語においてこのTsuに相当するのは、先行する母音の短縮を同時に伴う、次に来る子音(p, t, k...)の二重化であり、下記の例示により明らかとなる。

IPPAL, イツパイ.	ツサクジツ.
IPPAKU, イツパク.	ISSAKU-NEN, イツ
IPPAN, イツパン.	サク子.
IPPON-DATSI, イツ	ISSAN, イツサン.
ボンダチ.	IKKI, イツキ.
IPPENGOSHI-NI, イ	IKKIYO, イツキヨ.
ツベンゴシニ.	IKKIYŌ, イツキヤウ.
ITTŌ, イットウ	ISSHI, イツシ.
ITTSI, イツチ.	ISSHI, -su, -ta, イ
ITTSI, イツチ.	ツス.
IKKA, イツカ.	ISSHŌ, イツシヤウ.
IKKAIDO, イツカド	ISSHO-NI, イツシヨニ.
IKKAMBARI, イツカ	ISSHŌ-KEMMEI, イツ
ンバリ.	シヤウケンメイ.
ITTAL, イツタイ.	ISSHU, イツシユ.
ITTAN, イツタン.	ISSHŪ, イツシユウ.
IKKETUS, イツケツ.	ISSHIN, イツシン.
IKKO, イツコ.	ISSHIN, イツシン.
IKKŌ, イツカウ.	ISSETSU, イツセツ.
ISSAI, イツサイ.	ISSUM-BŌSHI, イツス
ISSAKUJITSU, イ	ンボウシ.

これらの単語を引く際には、「ツ」は存在しないものと見なされなければならない。たとえば Ihai (イハイ) という語の後に Ippai (イツパイ) がくるのである。「ン」という文字が、「バ」、「ビ」、「ブ」、「ペ」、「ポ」や「パ」、「ピ」、「プ」、「ペ」、「ポ」や「マ」、「ミ」、「ム」、「メ」、「モ」の前にくるときは、「ン」は n ではなく m という文字で表される。たとえば以下のとおりである。

バ) HOM-BA, ホンバ.	バ) KEM-PAKU, ケンパク.	マ) HOM-MATU, ホンマツ.
ビ) TSIM-BIKI, チンビキ.	ビ) AM-PI, アンピ.	ミ) GIM-MI, ギンミ.
ブ) TSIM-BUTSU, チンブツ.	ブ) AM-PUKU, アンブク.	ム) KAM-MURI, カンムリ.
ベ) KAM-BEN, カンベン.	ベ) KEM-PEI, ケンペイ.	メ) GEM-MEI, ゲンメイ.
ボ) TAM-BO, タンボ.	ボ) HAM-PO, ハンポ	モ) HOM-MON, ホンモン.

VORWORT.

Die Entwicklung eines Volkes hängt vor allen andern Dingen ab von der Pflege und der allgemeinen Verbreitung der Wissenschaften unter demselben. Die Richtigkeit dieses Satzes erkennend, hat unsere Regierung viele Schulen errichtet und aus Europa und Amerika eine grosse Anzahl von Gelehrten berufen, welche an diesen Schulen mit Hülfe von Dolmetschern unterrichten. Da sich nun für jeden strebsamen Schüler alsbald das Bedürfnis herausstellt sich auch ausser der Schule, durch Selbstunterricht weiter zu bringen, dieses aber nur mit Hülfe von Büchern möglich ist, die in fremden Sprachen geschrieben sind, so ist die Erlernung einer fremden Sprache das erste Erfordernis zur Erlernung einer Wissenschaft oder auch nur zur Erwerbung einer allgemeinen Bildung.

In früherer Zeit, als von allen europäischen Nationen nur die Holländer in Verkehr mit Japan standen, war es allein die holländische Sprache, welche vielfach, besonders von Ärzten erlernt wurde. Nach der Reorganisation der Regierung unter dem Mikado aber entwickelte sich ein reger Verkehr unseres Landes mit allen Staaten Europas und Amerikas. Da nun die Beziehungen dieser Länder zu Japan besonders auf dem Handel beruhen, die Sprache des Welthandels aber das Englische ist, so hat selbstverständlich diese Sprache die grösste Verbreitung unter unserem Volke finden müssen. An guten Hilfsmitteln zur Erlernung des Englischen ist daher auch kein Mangel.

Neben dem Englischen wurde besonders das Französische und Deutsche als die am weitesten verbreiteten von allen Sprachen gelehrt. Das Deutsche ist schon allein darum von so grosser Wichtigkeit für Japan, weil sehr viele deutsche Gelehrte an unseren Schulen unterrichten, und sind es von allen die in medicinischen Schulen, an denen Deutsche angestellt sind. Ganz abgesehen von dem Nutzen, welcher die Erlernung einer jeden ausgebildeten Sprache mit sich bringt, ist also das Studium des Deutschen für viele Japaner ein Bedürfnis geworden.

Es sind nun bereits mehrere Deutsch=Japanische Wörterbücher herausgegeben, zum Theil sind sie aber unvollständig, oder sie beschränken sich darauf die sinnverwandten Wörter der beiden Sprachen neben einander zu stellen, ohne erklärende Beispiele. Auch fehlen in allen diejenigen Ausdrücke, deren Neubildung durch die gewaltige Umwälzung in unserem ganzen Staats-

wesen erforderlich wurde. Jene Wörterbücher sind daher in mancher Hinsicht als veraltet zu betrachten und entsprechen nicht allen Anforderungen, welche an ein gutes Werk zu stellen sind.

Es schien uns daher zeitgemäsz, ein neues Japanisch=Deutsches Wörterbuch herauszugeben.

Da nun von allen Japanern, welche die englische Sprache erlernen, das Wörterbuch von J. C. Hepburn als vorzüglich gerühmt wird, so haben wir uns dieses zum Muster genommen und hoffen unseren Deutsch lernenden Landsleuten damit ein eben so nützlichcs Hülfsbuch zu liefern. Auch haben wir vielfach die vorhandenen Deutsch=Japanischen Wörterbücher benutzt. Nach reiflicher Ueberlegung und nachdem wir den Rath mehrerer erfahrenen japanischen Schulmänner darüber eingeholt, haben wir uns entschlossen die Wörter in dem Japanisch-Deutschen Theil nach dem japanischen Alphabet (*Iro-ha*) zu ordnen. (Siehe darüber die Anmerkung).

Nachdem wir auf diese Weise das Werk nach besten Kräften zusammengestellt hatten, hat Herr R. Lehmann, Lehrer an der Schule in *Kioto*, die Güte gehabt, dasselbe durchzusehen.

Es ist unser Hauptziel bei der Bearbeitung dieses Wörterbuches gewesen, den Studirenden ein Hülfsmittel an die Hand zu geben beim Anfertigen schriftlicher deutscher Arbeiten. Wir haben daher überall, wo es uns nöthig schien, den Gebrauch der Wörter durch beigefügte Beispiele erläutert, und hoffen, dass dadurch das Werk dem angegebenen Zweck entsprechen möge.

Tōkiō, im September 1877.

Die Verfasser.

Anmerkung.

Um den Anfängern in der Erlernung der deutschen Sprache das Nachschlagen oder Auffinden der Wörter möglichst zu erleichtern haben wir das vorliegende Wörterbuch nach dem japanischen Alphabet geordnet. Da sich nun dieser Anordnung die Schwierigkeit entgegenstellt, dass mehrere japanische Schriftzeichen dieselbe Aussprache haben und der Gebrauch dieser Zeichen bei vielen Wörtern nicht feststeht, so haben wir die Aussprache der Wörter, in lateinischen Schriftzeichen ausgedrückt, vorangestellt, dem dann die Aussprache in *Katakana* und die chinesischen Schriftzeichen folgen. Es ist dadurch für den japanischen Schüler eine grössere Übersichtlichkeit erlangt und zugleich denjenigen, die, der deutschen Sprache mächtig, dieses Wörterbuch zur Erlernung des Japanischen benutzen wollen, eine grosse Erleichterung geboten.

Folgende Bemerkungen erläutern die Regeln nach der wir die japanischen Laute mit lateinischen Lettern wiedergegeben und die Wörter geordnet haben.

Das japanische Alphabet besteht aus drei und siebenzig Buchstaben, einschliesslich des letzten ん (*n*). Unter diesen haben aber mehrere denselben Laut, z. B. い und け, ぢ und ぢ, ぢ und ぢ, ぢ und ぢ, ぢ und ぢ, ぢ und ぢ; daher werden alle mit い und け geschriebenen Wörter unter *I* (い), alle mit ぢ und ぢ geschriebenen Wörter unter *Dji* (ぢ) u. s. w. vereinigt und die fünf Buchstaben (け, ぢ, ぢ, ぢ und ぢ) fallen aus.

Nach den übrigen 44 reinen (*Sei-on*) und 23 unreinen (*Daku-on*) Lauten sind alle Wörter von い (i) bis す (su) in 67 Abtheilungen getheilt, wie folgt:

い	i	へ	he	ル	ru	ソ	so	ノ	no	フ	pu	キ	ki	モ	mo
ロ	ro	ベ	be	ヲ	o	ゾ	dzo	ク	ku	コ	ko	ギ	gi	セ	se
ハ	ha	ペ	pe	ワ	wa	ツ	tsu	グ	gu	ゴ	go	ユ	yu	ゼ	dze
バ	ba	ト	to	カ	ka	ヅ	dzu	ヤ	ya	エ	ye	メ	me	ス	su
パ	pa	ド	do	ガ	ga	ネ	ne	マ	ma	テ	te	ミ	mi		
ニ	ni	チ	tsi	ミ	yo	ナ	na	ケ	ke	デ	de	シ	shi		
ホ	ho	ヂ	dji	タ	ta	ラ	ra	ゲ	ge	ア	a	ヒ	hi		
ボ	bo	リ	ri	ダ	da	ム	mu	フ	fu	サ	sa	ビ	bi		
ポ	po	ヌ	nu	レ	re	ウ	u	ブ	bu	ダ	da	ピ	pi		

In jeder dieser 67 Abtheilungen sind die Wörter ebenfalls in Bezug auf ihren zweiten, dritten u. s. w. Laut nach diesen 67 Zeichen und dem Schluszlaut ヌ (*n*) geordnet. Die gleichen Laute stehen nach folgender Ordnung: zuerst der reine kurze Laut, hernach der reine lange Laut, dann der reine Doppellaut (イ ッ ト, *itto* etc.), viertens der unreine kurze Laut, fünftens der unreine lange Laut, sechstens der unreine Doppellaut (イ ッ バ ヌ, *ippaku* etc.), und endlich der letzte Laut (ヌ, *n*); z. B.:

^a (I), イ.	IBAU, イバフ.
I, イ.	IBARI, イバリ.
^b I(I), イヒ.	^c I(PPA)I, イツバ イ.
II, イイ.	IPPAKU, イツバ ク.
^e II-(I)RERU, イヒ イレ ル.	IPPAN, イツバ ン.
II-HARU, イヒ ハ ル.	INI, イニ.
^d II-(PA)NASHI, イヒ バ ナ シ.	INISHI, イニ シ.
IRO, イロ.	^f I-(HŌ), イハ ウ.
IRO-IRO, イロ イ ロ.	IBO, イボ.
IROHA, イロ ハ.	^g I(BŌ), イバ フ.
IRO-BANASHI, イロ バ ナ シ.	IPPON-DATSI, イツボン ダ ツ.
IROTO, イロ ト.	I-HEN, イヘ ン.
IRO-DORU, イロ ド ル.	IPPEN-GOSHI-NI, イツペ ンゴ シ ニ.
IRO-TSUYA, イロ ツ ヤ.	ITO, イト.
IRO-DZUKI, イロ ツ キ.	ITŌ, イダ フ.
IRO-KOTŌBA, イロ コ ト バ.	ITTŌ, イット ウ.
IRO-GOTO, イロ ゴ ト.	IDO, イド.
I-RON, イロ ン.	I-IDŌ, イダ ウ.
I-HAI, イハ イ.	IDO-BATA, イド バ タ.
I-HADZUSU, イハ ヅ ス.	
I-BA, イバ.	

- a) der reine, kurze Laut der ersten Silbe.
 b) der reine, kurze Laut der zweiten Silbe.
 c) der reine, kurze Laut der dritten Silbe.
 d) der unreine, kurze Laut der dritten Silbe.
 e) der unreine Doppellaut der zweiten Silbe.
 f) der reine, lange Laut der zweiten Silbe.
 g) der unreine, lange Laut der zweiten Silbe.

Wie schon oben erwähnt, so richtet sich die Reihenfolge der Wörter nicht nach der Schreibweise, sondern nur nach der Aussprache. Es sind daher diejenigen Wörter, welche mit demselben Laute anfangen in eine Abtheilung gebracht, wenn derselbe auch mit einem anderen Zeichen geschrieben wird (wie イ und 伊). Einige Schwierigkeit verursachen solche Wörter in denen zwei oder drei Schriftzeichen zusammen nur einen Laut

ausdrücken, wie z. B. ナ ム (*Tsio*), ナ ヲ (*Tsiyō*), シ ム, (*Sho*), シ ヲ (*Shō*), シ ム (*Shu*), シ ム ム (*Shū*) u. s. w. Ebenfalls solche Wörter in denen der gleiche Laut durch verschiedene japanische Schriftzeichen ausgedrückt wird, wie z. B. シ ヲ, シ ヲ フ, シ ム ム, セ ム, セ フ u. s. w. Da nun in diesem Wörterbuche die Wörter nur nach ihrer Aussprache geordnet sind, so haben wir シ ヲ, シ ヲ フ, シ ム ム, セ ム und セ フ zusammen mit *Shō*, od. ナ ヲ, ナ ヲ フ, ナ ム ム und テ ム mit *Tsiyō* bezeichnet.

Um die Wörter, in welchen die eben angeführten Laute vorkommen, leicht auffinden zu können, merke man das Folgende:

- 1). ト ム, ヲ ム u. s. w. sind alle mit *Tō* bezeichnet und stehen nach dem langen Laute von ナ (*o*) in der Abtheilung ト (*Tō*).
- 2). ナ ヲ, テ ム u. s. w. sind alle mit *Tsiyō* bezeichnet und stehen nach dem langen Laute von ム (*yo*) in der Abtheilung ナ (*Tsi*).
- 3). ナ ヲ wird mit *Tsiya* bezeichnet und folgt auf den kurzen Laut von ナ (*ya*) in der Abtheilung ナ (*Tsi*).
- 4). ナ ム od. シ ム wird mit *Djō* bezeichnet und folgt auf den kurzen Laut von ナ (*o*) in der Abtheilung ナ (*Djō*).
- 5). シ ム ム, シ ヲ, セ ム, デ ム u. s. w. werden alle mit *Djō* bezeichnet und stehen nach dem langen Laute von ナ (*o*) in der Abtheilung ナ (*Djō*).
- 6). ヲ ム wird mit *Riyo* bezeichnet und folgt auf den kurzen Laut von ム (*yo*) in der Abtheilung ヲ (*Ri*).
- 7). ヲ ヲ, od. レ ム wird mit *Riyō* bezeichnet und folgt auf den langen Laut von ム (*yo*) in der Abtheilung ヲ (*Ri*).
- 8). ヲ ム wird mit *Riū* bezeichnet und folgt auf den kurzen Laut von ム (*u*) in der Abtheilung ヲ (*Ri*).
- 9). カ ム, コ ム u. s. w. sind alle mit *Kō* bezeichnet und stehen nach dem langen Laute von ナ (*o*) in der Abtheilung コ (*Ko*).
- 10). ケ ム, ケ フ, キ ヲ u. s. w. sind alle mit *Kiyō* bezeichnet und stehen nach dem langen Laute von ム (*yo*) in der Abtheilung キ (*Ki*).
- 11). シ ム wird mit *Sho* bezeichnet und steht nach dem kurzen Laute von ム (*yo*) in der Abtheilung シ (*Shi*).
- 12). シ ヲ, セ ム u. s. w. sind alle mit *Shō* bezeichnet und stehen nach dem langen Laute von ナ (*o*) in der Abtheilung シ (*Shi*).
- 13). シ ヲ wird mit *Sha* bezeichnet und folgt auf den kurzen Laut von ナ (*a*) in der Abtheilung シ (*Shi*).
- 14). シ ム wird mit *Shu* bezeichnet und steht nach dem kurzen Laute von ム (*yu*) in der Abtheilung シ (*Shi*).
- 15). シ ム, od. シ ム ム wird mit *Shū* bezeichnet und folgt auf den langen Laut von ム (*yu*) in der Abtheilung シ (*Shi*).

Die Ordnung der Wörter in den 67 Abteilungen nach den angeführten 67 Buchstaben hat in einem Falle nicht eingehalten werden können, nämlich da, wo *y* (*tsu*) vor den Buchstaben *ʃ*, *ʒ*, *t* u. s. v. steht. Diesem *Tsu* entspricht im Deutschen eine Verdoppelung des folgenden Consonanten (*p*, *t*, *k* ...) mit gleichzeitiger Verkürzung des vorausgehenden Vokals wie aus folgenden Beispielen ersichtlich ist:

IPPAI, イツバ^イ.
 IPPAKU, イツバク.
 IPPAN, イツパン.
 IPPON-DATSI, イッ
 ポンダチ.
 IPPENGOSHI-NI, イ
 ツパンゴシニ.
 ITTŌ, イットウ.
 ITTSI, イツチ.
 ITTSI, イツチ.
 IKKA, イツカ.
 IKKADO, イツカド.
 IKKAMBARI, イツカ
 ンバリ.
 ITTAI, イツタイ.
 ITTAN, イツタン.
 IKKETSU, イツケツ.
 IKKO, イツコ.
 IKKŌ, イツカウ.
 ISSAI, イツサイ.
 ISSAKUDJITSU, イ

ッサクジツ.
 ISSAKU-NEN, イッ
 クテン.
 ISSAN, イツサン.
 IKKI, イツキ.
 IKKIYO, イツキヨ.
 IKKIYŌ, イツキヤウ.
 ISSHI, イツシ.
 ISSHI, ^{su}-ⁿⁱ, イ
 ツス.
 ISSHŌ, イツシヤウ.
 ISSHO-NI, イツシヨニ.
 ISSHŌ-KEMMEI, イツ
 シヤクンメイ.
 ISSHU, イツシュ.
 ISSHŪ, イツシユウ.
 ISSHIN, イツシン.
 ISSHIN, イツシン.
 ISSETSU, イツセツ.
 ISSUN-BŌSHI, イツス
 ンボウシ.

Beim Nachschlagen dieser Wörter ist das ツ als nicht vorhanden zu betrachten. Es folgt z. B. auf das Wort *Ihai* (伊 伊) *Ippai* (イ ツ パイ). Wenn der Buchstabe ヌ vor ハ, ヒ, フ, ヘ, ホ; ハ, ヒ, フ, ヘ, ホ; und マ, ミ, ム, ヨ, ヨ kommt, so wird er nicht durch den Buchstaben *n*, sondern durch den Buchstaben *m* bezeichnet; z. B.:

ハ)	HOM-BA, ホンバ.	バ)	KEM-PAKU, ケンパク.	マ)	HOM-MATSU, ホンマツ.
ビ)	TSIM-BIKI, チンビキ.	ピ)	AM-PI, アンピ.	ミ)	GIM-MI, ギンミ.
ブ)	TSIM-BUTSU, チンブツ.	プ)	AM-PUKU, アンブク.	ム)	KAM-MURI, カムリ.
ベン)	KAM-BEN, カンベン.	ペ)	KEM-PEI, ケンペイ.	メ)	GEM-MEI, ゲンメイ.
ボ)	TAM-BO, タンボ.	ポ)	HAM-PO, ハンポ.	モ)	HOM-MON, ホンモン.

4-2. 日本語研究資料としての位置

独和辞書に対して和独辞書の刊行は遅れること5年、その形態・内容は先行するJ・C・ヘボンによる和英・英和辞書の『和英語林集成』再版(1872)の「和英の部」によっている(ただし、アルファベット順からイロハ順に改編されている)。

このタイムラグは、母語から外国語への訳出は高度なため(宮田(2010)・倉島(2007))、まず外国語(ここではドイツ語)から母語(ここでは日本語)への訳出がなされた独和辞書の土壌の上に、和独辞書が成立したものにとらえることができよう。

しかし、『和獨對譯字林』は、非母語話者の使用を想定した『和英語林集成』を母語話者が用いるというねじれが生じていると考えられる。それは、二言語辞書(小島(1999)など)において、利用者と母語との関わりを含めると、そもそも〈外国人が日本語を理解することを念頭に置いた〉『和英語林集成』「和英の部」(外国人のための日本語の見出し語→外国人のための外国語(英語)による語義・用例の翻訳など、非母語話者への二言語辞書)を〈日本人が外国語を理解することを念頭に置いた〉『和獨對譯字林』(日本人のための日本語の見出し語→日本人のための外国語(ドイツ語)による語義・用例の翻訳など、母語話者への二言語辞書)として日本語の母語話者が用いることは、和独辞書黎明期のこととはいえ留意する必要がある。

『和英語林集成』「和英の部」 → 外国人が日本語を知るため

『和獨對譯字林』 → 日本人がドイツ語を知るため

上記の点から離れて、『和英語林集成』との関係を見出し語や語義や用例の観点から、細かに比較を行った前出の坂本(1985・1988・1989)によると『和獨對譯字林』が『和英語林集成』の形態・内容をそのまま踏襲することなく、調整を図っていることについて考察がなされている。

その他にも見出し語 TOMONI の用例において、『和英語林集成』初版(1867)と再版(1872)では「わたくしと江戸へゆく」(以下、ローマ字表記を漢字仮名交じりにあらためる)とあり、3版(1886)で「わたくしと東京へゆく」に変化している。そして、「東京」は Tōkyō と綴られ、「トウキョウ」と読んでいたことも確認できる。それに先んじて、再版か

ら5年後の『和獨對譯字林』ではすでに tōkiō「トウキョウ」とあり、再版の「江戸」を改めていることからその事実をうかがい知ることができる。しかし、いずれにせよドイツの文化・文明また慣習や制度に向けた調整ではなく、日本語そのものの調整である（今後の調査を要するところである）。

しかしながら、『和英語林集成』は英語が用いられているものの日本語辞書（非母語話者への一言語辞書）でありながらも国語辞書（母語話者への一言語辞書）の側面も持ち合わせている。軸足が定まっていない、いわゆるねじれともいえる現象は、現代から見れば、日本における二言語辞書の編集姿勢のゆれともみなし得る。

そのために、18年後に刊行された和独辞書である『新撰 和独字彙』（1895）の内容如何といった問題もあるようだが、『和獨對譯字林』のものに比べ、（個々の検証は欠くことができないが）ドイツ語で記されているものの日本語辞書としての評価なのか、国語辞書としての評価なのかといった視点を定めずして、稚拙であるとすることはできない。

ローマ字綴りについては、ヘボン式をもとにしながらも、ザ・ジャ・タ・ダ・チャ・チャ行に限っても以下のような異なりがある（三修社の複製版には単音の五十音索引のカードがある）。なお、長音のものは長音符を取った。また、『和英語林集成』再版と異なるものには下線を付した。見出し語のものを示したため、『和獨對譯字林』の「注釈」（4-1.）とは一部異なるものもある。

<u>ザ</u> dza	<u>ジ・ヂ</u> dii	ズ・ヅ dzu	<u>ゼ</u> dze	<u>ゾ</u> dzo
<u>ジャ・ヂャ</u> dia		<u>ジュ・ヂュ</u> diu		<u>ジョ・ヂョ</u> djo
タ ta	<u>チ</u> tsi	ツ tsu	テ te	ト to
ダ da			デ de	ド do
<u>チャ</u> tsia		<u>チュ</u> tsiu		<u>チョ</u> tsio

5. まとめにかえて

1872年と1873年の独和辞書、1877年の和独辞書の刊行以後、独和辞書と和独辞書の刊行にはしばらくの時間を要する。そのために、これらの辞書の影響はドイツ語の広がり、日本語の訳語との関わりに、大きな

影響を与えたものと考えられる。仏英蘭の『三語便覧』（1854）に続き、仏英独の『三語便覧』（1872頃）が刊行されたのも、時代の要請を顕著に受け止めたものであろう。

そこで、本稿で取り扱った辞書について、実態を検討するための試みとして、収録語数と訳語という観点から若干ではあるが記すこととする。

5-1. 収録語数

『字和袖珍字書』『袖珍字語譯囊』『和譯獨逸辭典』『獨和字典』の総見出し語数の概算については信岡（2002a・2002b・2003）のものがあるが、ここではAの部の見出し語数と頁数から1頁当たりの見出し語数の平均を算出し、辞書部分の全頁に乗じた。なお、以下に頁数（辞書部分）⁵と、Aの部のページ数と括弧内に見出し語数も示す（『和獨對譯字林』については「アの部」にあたる）。また、森岡（1985）の方法によって、Aの部の頁数が辞書の総頁数に占める割合を示す。さらに各部の収録語数を算出することで、依拠資料との関わりがより明確になるものとする。

<独和辞書>

『和譯獨逸辭書』（1872-1873）	1,226頁 ⁶	約29,000語	Aの部	102頁	（2,397語）	8.3%
『字和袖珍字書』（1872）	1,399頁	約23,000語	Aの部	144頁	（2,325語）	10.3%
『袖珍字語譯囊』（1872）	499頁	約7,000語	Aの部	54頁	（770語）	10.8%
『和譯獨逸辭典』（1872）	1,046頁	約24,000語	Aの部	144頁	（3,277語）	13.8%
『獨和字典』（1872）	712頁	約31,000語	Aの部	76頁	（3,273語）	10.7%

<和独辞書>

『和獨對譯字林』（1877） ⁷	1,098頁	24,368語	Aの部	45頁	（1,001語）	4.1%
-----------------------------	--------	---------	-----	-----	----------	------

<英和辞書>

『英和对訳袖珍辞書』（1862） ⁸	953頁	32,796語	Aの部	55頁	（1,933語）	5.9%
『改正増補 和訳英辞書』（1869）	677頁	約33,000語	Aの部	39頁	（1,908語）	5.8%

〔表 1〕訳語の比較

	『英和対訳袖珍辞書』 (1862) ※二行割は () で示す	『和譯獨逸辭書』 (1872-1873) ズユタリーン体	『字和袖珍字書』 (1872) フラクトウア体
化学	Chemistry, s. 分離術 122頁	Chemie, f. 舍密術 天-187頁	Chemie, f. ブンセキジユ ツ 分析術 267頁
会社	Company, s. 全上〔※羣隊、 衆會〕、交親、社中、兵士、 軍兵、一組 (凡百人ヲ云)、 職人ノ仲間 145頁	Gesellschaft, f. 仲間、同伴 天 2 -156頁	Gesellschaft, f. ナカマ。シ ヤチウ 社中 521頁
文化	Culture, s. 耕作、育殖、教 導、修善 183頁	Cultivieren, v. a. 耕作スル、 殖スル、行フ、開化スル Cultur, f. 全上ノ麦 天-194頁	Hopfen, m. —, v. a. カラ ハナ 唐花 (草ノ名) トビ アガル。オドル 610頁
ホップ	Hop, s. 躍り、草名 372頁	Hopfen, m. 麥酒ニ味付ル 草 Hopfen, v. a. 全上ヲ調合 スル 天 2 -240頁	
文学	Literature, s. 字知り 462頁	Literatur, f. 文學 天 2 -349頁 (Philolog, m. 文學 天 2 -481頁)	Literatur, f. シヨハウ 書法 702頁
自然	Nature, s. 天地萬物、宇宙、 本体、造物者、性質、天 地自然ノ道理、品種 526頁	Natur, f. 天造物、有様 天 2 -433頁	Natur, f. テンチ 天地。ウ チウ 宇宙。パンブツ 萬 物。ゾウブツシヤ 造物 者。セイシツ 性質。テン リ 天理 759頁
自然の	Natural, adj. 自然ノ、天造 ノ、生レ得タル、當前ノ、 天地万物ノ 526頁	Natürlich, adj. 自然ノ 天 2 -434頁	Natürlich, a. —, ad. シゼ ンノ。テン子ンノ。シゼ ンニ 759頁
神経	Nerve, s. 神經、筋根 529頁	Nerv, m. 神經、筋 天 2 -438頁	Nerv(e), m. (& f.) シンケ イ 神經 761頁
小説	Novel, s. 新法、新説、法 度ノ創立 538頁	Roman, m. 作り物語 地 2 -549頁	Roman, m. ツクリモノガ タリ 小説 846頁
哲学	Philosophy, s. 理學 595頁	Philosophie, f. 理學 地 2 -481頁	Philosophie, f. リガク Philosoph, m. リガクシヤ 理學者 796頁
鉄道	Railroad, s. 火輪車ノ道 ※ Railwayも併記 658頁	Eisenbahn, f. 鉄道 天 2 -55頁	Eisenbahn, f. テツダウ 鐵 道 369頁
ソーセージ	Sausage, s. 豚ノ腸ヲ裏返 シテ能ク洗ヒ其内ニ豚肉 胡椒塩等ヲ交ゼツメテ製 シタル食物 712頁	Wurst, f. 腸結 地 2 -984頁	Wurst, f. チヤウヅメ 蜡腸 1288頁
魔女	Witch, s. 魔ヲ使フ女 942頁	※注 4 参照	Hexe, f. オンナノマハウ ツカヒ 妖術女 592頁
物理	Physics, s. pl. 窮理學 595頁 (Naturalist, s. 窮理學者 526頁)	Physik, f. 窮理學 地 2 -481頁 (Naturforscher, m. 窮理 學者 Naturlehre, f. 窮理 ノ学問 天 2 -434頁)	Physik, f. キウリガク 窮 理學 796 頁 (Naturforscher, m. キウ リカ 窮理家 キウリ學者 759頁)

『袖珍字語譯囊』 (1872)	『和譯獨逸辭典』 (1872)	『獨和字典』 (1873) ※〈〉内はルビ表記
Chemie, f. 分析術、銷鍊術 94頁	Chemie, f. 舍密術 233頁	Chemie, f. 化學〈クワガク〉 127頁
Gesellschaft, f. 交游、群集 190頁	Gesellschaft, f. 交際、會合、 同勢 426頁	Gesellschaft, f. -en. 一致。 仲間。社中 223頁
	Cultur, f. 耕作、改正スル ヲ、學問ヲ勒(マ)メルヲ 241頁	Cultur, f. 耕作〈コウサ ク〉。教育。改革。開化 〈カイクワ〉。行〈ヲコナ ヒ 132頁
Hopfen, m. 躍り 226頁	Hopfen, m. 踊り、草名(カ ナムグラ) 488頁	Hopfen, m. カラハナ草(麥 酒〈バクシユ〉ノ苦味〈ニ カミ〉ヲ加〈クハエ〉ル) Hopfen, v. a. 全上ヲ麥酒 ニ入テ煮〈ニ〉ル 268頁
	Literatur, f. 文學 567頁	Litteratur, f. 學問 (Litterat; Litterator, m. -en. 文學 325頁)
Natur, f. 自然 298頁	Nature, f. 自然、體質、種 類、萬物 617頁	Nature, f. -en. 自然〈シゼ ン〉。性質〈セイシツ〉。萬 物〈パンブツ〉 368頁
Natürlich, a. 自然ノ、天造 ノ、生レ得タル、當前ノ、 天地萬物ノ 299頁	Natürlich, a. et. ad. 自然ノ、 生レ付ノ、自由ニ 才智 アル 617頁	Natürlich, a. 自然ノ。當前 〈アタリマエ〉ノ。天造〈ゾ ウ〉ノ。 369頁
Nerve, f. 神經、筋根 Nerven, f. pl. 同上 300頁	Nerv, m. 神經 Nerve, f. 神經、筋 619頁	Nerve, m. -en. 神經〈シン ケイ〉 370頁
Roman, m. 造物、新法、創 立(法度ノ) 339頁	Roman, m. 造り咄 692頁	Roman, m. -e. 草雙紙〈ク サゾウシ〉 433頁
Philosoph, m. 理學者 316頁	Philosophie, f. 聖學、理學 648頁	Philosophie, f. 理學 396頁
		Eisenbahn, f. -en. 鐵道〈ド ウ〉 163頁
Wurst, f. 割烹ノ名、腸詰、 家ノ腸ニ肉等ヲ詰タル食 物 481頁	Wurst, würste, f. 豕肉胡椒 鹽等ヲ交テ製シタル菓子 Auf der wurst herum fahren, 寄食スル 1002頁	Wurst, f. -ürste. 腸〈チヨウ ヅメ。座蒲團〈ザブトン〉。 船〈フネ〉ノ網具〈ツナグ ノ名。圓〈マル〉ク短〈ミ チカ〉キ捏〈コ子〉タル粉 〈コ〉 673頁
	Hexe, f. 魔ヲ遣フ女 474頁	Hexe, f. -n. 魔(マ)ヲ使 (ツカフ)女。奸(カン)女。 燕(ツバメ)の一種(シユ)。 258頁
	Physik, f. 窮理學 648頁 (Naturkunde, f. 窮理學 Naturkundige, m. 博物窮 理家 Naturlehre, f. 窮理學 617頁)	Physik, n. 窮理〈キウリ 學 396頁 (Naturgeschichte, f. 博物學 者〈ハクブツガク〉 Naturlehre, f. 窮理學 369頁)

5-2. 訳語

明治初期の独和辞書の作成において、既存の独蘭、独英、独仏などの対訳辞書をもとにしている。その経緯については、『袖珍字語譯囊』の巻末の附言にも類する内容が記されている（その後に記される貨幣についての記述は略す）。

- 一 原書字國ロトツク氏ノ字佛對譯辭典ニ因ト雖モ其ノ和解ヲ施スヤ傍チエム字英對譯ボムホフ字蘭對譯辭典ヲ用イ勉テ確實ヲ主トス

また、『和譯獨逸辭書』の緒言の末に次のようにある。

原書ハ獨乙蘭對譯辭書ナリ故ニ譯語多クハ和蘭字彙ヲ襲用ス其字彙ニ闕スルモノハ之ヲ獨乙英對譯辭書ニ照シテ和譯英辭書ヲ用ユ両書ニ闕テ決セサルモノモノハ決テ劉氏ニ取ル

2書の記述を融合することは適切ではないかもしれないが、独→仏⁹、また独を軸に独蘭→蘭和、独英→英和という二段階を踏んでいる（このことは特殊なことではなく、英和の対訳辞書の成立も英蘭→蘭和と二段階で進められている）。結果、先行して刊行された蘭和辞書と英和辞書に引き込むことで訳語を援引することを可能としている。また、蘭和辞書と英和辞書の役割そのものを見出すことができる。なお、上記の「和譯英辭書」とは、『英和対訳袖珍辭書』（1862）の流れをくむ「薩摩辭書」と呼ばれた『改正増補 和訳英辭書』（1869）などと考えられる（今後の検討を要するところである）。

そこで、田中（1968）p.558-562と森岡（1991）p.41、117と信岡（2003）に掲出されたことばを参考としたり含めたりしながら訳語の変遷、また影響関係について、いくつかの見出し語の訳語の比較を示す（〔表1〕※左端に現代日本語を示し、英語のアルファベット順に配列する）。なお、本稿で扱った独和辞書の他に、試みに先行する英和辞書から『英和対訳袖珍辭書』（1862）を含める（『官許 仏和辞典』（1871）も考慮する必要がある（惣郷（1982）・注15））。

今後、様々な検証が必要だが、先行する対訳辞書との関わりは見出されながらも、本論で扱った独和辞書間での相互の関係性は無さそうである。

また、『獨和字典』の BLU ～BOC (p.112) を例にすると、Bfutgeschwur (マ)¹⁰に「瘍腫^{チョウシュ}ノ名」、Bluthänflingに「鳥^ナノ名」、Blutkrautに「草^{クサ}ノ名」、Bzutholz (マ)¹¹に「樹^ナノ名」のように、「～ノ名」が散見する。¹² 他にも Blutkrankheit に「病名^{エキ カ、ワリ} (血液ニ關係タル)」とある (形態素ごとに理解したのであろう)。このような示し方は、『英和对訳袖珍辞書』はじめ見られるが、現象や物体としての大枠は理解しながらも該当するものと結びつかない、またはそもそも日本に存在しないなどの理由により、説明がかなわなかったものと考えられる。採録理由に関しては、日本人がドイツ語の文献をとおして、目にする可能性を考慮したものと考えられる。それは、非母語話者が目にしたり耳にしたりした外国語について、具体的には把握できなくても、いずれに分類されるべき現象や物体であるのかを理解することができるという二言語辞書の姿勢のあらわれといえよう。一方、たとえば Bluthochzeitとは、直訳すると「血の結婚式」となり、歴史的には、パリのカトリック教徒がユグノー派を虐殺した「聖バールソロミューの虐殺」(1572年8月24日)のことを指す。『獨和字典』において同語には「往昔プロテスタン^{シウ}ノ宗ノ人ガ佛蘭西ノパリス^{ライ}ニ於テ千五百七十二年^{コロ}ニ殺サレタル」⁷と詳細な説明を加えていることは興味深い (史実の諸辞書での記述も援引関係を示すものと扱えよう)。

5-3. 今後の課題

今回扱った独和辞書の刊行年がほぼ同時期のため (先にも記したのであるが) に相互の援引関係は考え難いものと思われる。それよりも訳語の面で、先行する蘭和辞書とそれを大きく利用した英和辞書の影響をそれぞれに表出した派生形ともいえるのではなかろうか。

↗ 独和辞書A

蘭和辞書・英和辞書など → 独和辞書B

↘ 独和辞書C

さらには英華辞典また和刻版の英華辞典¹³などとの関わりも考慮する必要があるかもしれない (陳 (2012))。

一方、後発のため辞書としての訳語のオリジナリティではなく影響とということにはなるが、すべてを同時代の英華辞典や英和辞書の訳語に委

ねられるのかといった問題にもつながる¹⁴。それは、近代日本を牽引したドイツを理解するために欠くことのできない独和辞書が、多くの知識層に用いられたことは想像に難くない。独和辞書に収載される訳語が、必然的に日本語に取り込まれ、使用され、展開していったという流れについて、独和辞書が発した影響を今後検証する必要がある。

国際情勢、それによる条約など精査すべきではあるが、日本語の訳語などについて、英和辞書にもう一つの潮流として独和辞書を加えることができそうである。一例を挙げるならば、『和獨對譯字林』の勝海舟の賛辞や中村正直の序からも、近代の日本と、その根幹としての近代の日本語が確立されていく上での、独和辞書と和独辞書の扱われ方や位置づけを見出すことができるものと考えられるからである。

1. にも記したが、大きな流れにおける位置づけを検討していく必要がある。黎明期の対訳辞書が訳語を生み出す（結び付ける）段階から、使用される訳語を受け止めて書き留める段階に移行していったことを重視しなければならない。

あわせて、和独辞書においては、非母語話者への二言語辞書的な語義・用例から、母語話者への二言語辞書としての語義・用例への転換といった面の考察を以後のものとの比較をとおして行う必要がある。

印刷・出版に関わることとしては、『和譯獨逸辭書』（1872-1873）のズクタリン文字、『字和袖珍字書』（1872）のフラクトゥアの活字、『獨和字典』（1873）における上海のAPMP¹⁵といったことも、辞書としての成立と大きく関わり、今後の検討事項として含めたい。

注

¹ 櫻井（2009）。1854年刊の仏英蘭が一般的に知られるところである。

² 宮永（1993）では、『『独和辞書』（第一分冊）』とする。

³ 京都大学図書館蔵本は前部のみで、丁ごとのオモテとウラにそれぞれノンブルが振られ辞書部分は195頁。洋装に改装されている。国会図書館本は天地の二分冊からなる和装（注6）。

⁴ 「天の部」2編219頁と220頁（見開き）に関しては疑わしい点がある。219頁（左頁）一番下が Heurechen（現代語訳「干し草用熊手」）であるのに対し、220頁（右頁）一番上が Himmelsgegend（現代語訳「天の一角、方向」）と、

Heu⁻ から Him⁻ へと単語がかなり飛んでいるのである。Heu⁻ から Him⁻ のあいだには、ドイツ語においては基本単語となる、たとえば、heute（現代語訳「今日」）、Hexe（現代語訳「魔女」）、hier（現代語訳「ここで」）、Hilfe（現代語訳「助け、支援」）、Himmel（現代語訳（「空、天、天国」）などが存在するはずであり、特に Himmel と Gegend の合成語である Himmelsgegend があって、Himmel がないのは不自然といわざるを得ない。原稿あるいは版木の欠損であろうか。今後の調査が望まれる。

- ⁵ 語形変化を同一行内に示すもの（一見、見出し語が二つ並ぶように見える）は一語とした。また、派生語や関連語や熟語などを小見出しで示すものは親見出しにまとめて数えていない。
- ⁶ 「天の部」は1～195頁（196、197、198（ノンブルなし）頁は白紙のため含めない）までと2編1～440頁まで。「地の部」は2編の続きで441～1,031頁。結果195頁+1,031頁で1,226頁からなる（注3）。
- ⁷ 坂本（1985）による。『和英語林集成』再版（1872）の「和英の部」は22,949語。『和英語林集成』再版の「和英の部」の「A（ア）の部」の収録語数は955語であり、『和獨對譯字林』は1,001語と46語の増加が生じている。試みにAMAで始まるそれぞれの見出し語を確認したところ、『和英語林集成』が52語、『和獨對譯字林』が56語で、48語が共通し、4語が削除、8語が増補されている。
- ⁸ 木村（2015）。
- ⁹ 見出し語のソースとして使用し、訳語は独蘭、独英によったか。
- ¹⁰ Bfutureschwur とあるが、Blutgeschwur のこと。誤植。
- ¹¹ Bzutholz とあるが、Blutholz のこと。誤植。
- ¹² Bfutureschwur（マ）は「疔」を指す。現代では、Bluthänfling には学名 *Carduelis cannabina*（＝ムネアカヒワ）が、Blutkraut には学名 *Lythrum salicaria*（＝エゾミソハギ）が、Bzutholz（マ）には学名 *Haematoxylum campechianum*（＝アカミノキ）が、それぞれ該当するであろう。
- ¹³ 例えば、S. W. ウィリアムズ『英華韻府歴階』（1844）の和刻版の柳沢信大による『英華字彙』（1869）。
- ¹⁴ 陳（2012）には次のようにある。

英華辞典以外に、他の対訳辞典も中国へ新語を伝える重要なルートの一つである。商務印書館の『徳華大字典』（1920）は『独和字典大全』、『独和新辞書』、『独和大字典』、『独和法律新辞典』、『独和兵語辞書』の6種類の日本の独和辞書を参照している。実際にそのような編集方針は後にもずっと続けられていた。ほかの対訳辞書に関してもこの視点から訳語の成立を見直す必要があるだろう。ただ、その中で日漢辞書の類はやや特別で、日本語の見出しがそのまま中国語訳語になっているケースも多いからである。

- ¹⁵ 俗称『薩摩辞書』とされる『改正増補 和英辞書』（1869）（増補再版にあたる『大正増補 和訳英辞林』（1871）もある）と、『官許 仏和辞典』（1871）が先行して印刷されている（木村（2015））。これらAPMPで印刷された4書の相互の見出し語や訳語についての検証も意義あるものと考ええる。また、APMPでの印刷について、印刷技術やその紹介者の有無が大きく関わるが、信岡（2003）では九州からの距離を一つの理由としている。

参考文献

- 石本岩根（1933・1934）「明治年間に於ける獨和及び和獨辭書に就て」「愛書」1、2
- 小澤健志（2015）『お雇い独逸人科学教師』青史出版
- 上村直己（1989）「日本における独和辞書発達小史」「熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編」24
- 上村直己（2008）『近代日本のドイツ語学者』鳥影社
- 木村一（2015）『和英語林集成の研究』明治書院
- 倉島節尚（2007）「『メドハースト 英華辞典』の項」『日本語学研究事典』明治書院
- 小島義郎（1999）『英語辞書の変遷—英・米・日本を併せて—』研究社
- 榊原正義（2012）「明治初期京都におけるドイツ語教師ルドルフ・レーマンの事跡」「醫譚」復刊96（通巻113）
- 坂本浩一（1985）「『和独対訳辞林』について」「語文研究」60
- 坂本浩一（1988）「『和独対訳辞林』に於ける見出し・同義語表示部の検討—『和英語林集成』を交えて—」「語文研究」65
- 坂本浩一（1989）「『和独対訳辞林』注記部に関する検討—『和英語林集成』との異同状況から—」「語文研究」66/67
- 櫻井豪人（2009）『三語便覧 初版本影印・索引・解説』港の人
- 辞書協会編（1996）『日本の辞書の歩み』辞書協会
- 杉本つとむ（1990）『長崎通詞ものがたり—ことばと文化の翻訳者—』創拓社
- 鈴木重貞（1975）『ドイツ語の伝来—日本独逸学研究—』教育出版センター
- 鈴木重貞解説（1981）『復刻版「字和袖珍字書」「和訳独逸辞典」「独和字典」「和独対訳字林解説』』三修社
- 惣郷正明（1982）「ことばの散歩道3 岡田好樹訳仏和辞典」「言語生活」363
- 惣郷正明（1989）『目で見ると明治の辞書』辞書協会
- 園田尚弘・若木太一編（2004）『辞書遊歩—長崎で辞書を読む—』九州大学出版会
- 田中梅吉（1968）『総合詳説 日獨言語文化交流史大年表』三修社
- 陳力衛（2012）「英華辞典と英和辞典との相互影響—20世紀以降の英和辞書による中国語への語彙浸透を中心に—」「Juncture 超域的日本文化研究」3

- 中井えり子 (2007) 『『官許 佛和辞典』と岡田好樹をめぐって』「名古屋大学附属図書館研究年報」 6
- 中川征人 (1991) 『薩摩学生の軌跡—「独和字典」の学生を中心に—』
- 信岡資生 (1996a・1996b・1996c・1997) 「日独二言語対訳辞書総覧 序・総目録 1～3」『成城大学経済研究』133、134、135、136
- 信岡資生 (2001) 『『袖珍獨和新辞林』について 1・2』「成城大学経済研究」151/152、153
- 信岡資生 (2002a・2002b・2003) 「日独対訳辞書解題 1～3」『成城大学経済研究』157、158、161
- 根本道也 (2008) 『ドイツの標準語—その生い立ちと辞典の個性—』同学社
- 橋本郁雄 (1996) 「ドイツ語の辞書の歴史」『日本の辞書の歩み』辞典協会
- 宮田和子 (2010) 『英華辞典の総合的研究—19世紀を中心として—』白帝社
- 宮永孝 (1993) 『日独文化交流史—ドイツ語事始め—』三修社
- 森岡健二 (1985) 『『英和口語辞典』第3版の翻訳語について』『英和口語辞典 (第3版)』(復刻版) 名著普及会
- 森岡健二 (1991) 『改訂 近代語の成立—語彙編—』明治書院
- 弥吉光長 (1990) 『未刊史料による日本出版文化 5 近代出版文化』ゆまに書房
- 結城謙治 (1975) 「『字和袖珍字書』(明治5年)の編者の一人桜井勇作氏に就いて」『ドイツ文学』54
- ランドウ、シドニー・I 著／小島義郎・増田秀夫・高野嘉明訳 (1988) 『辞書学のすべて』研究社出版 (*Dictionaries: The Art and Craft of Lexicography* (1984) の日本語訳)
- Mikkelsen, Hans Kristian. (1992) What did Ščerba actually mean by “active” and “passive” Dictionaries? In Hyldgaard-Jensen, Karl/ Zettersten, Arne. (eds.) *Symposium on Lexicography V. Proceedings of the Fifth International Symposium on Lexicography*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- 付記：明治学院大学図書館に、御所蔵の『和獨對譯字林』の図版掲載をおいとめいただいた。この場を借りてお礼申し上げます。また、本研究はJSPS 科研費 16K02737の助成を受けたものである。